

句集 「風の蝶」

浅田 洋

歩に纏ふ私の風に蝶が来て

俳句をはじめて五、六年。日々の生活を詠んだ句が相当な数になりました。散歩途中、きまぐれな蝶が飛来するようにたまにたま脳裏に浮かんだ句ばかりです。

先に、十年前に亡くなった長男を哀悼する句を、私俳句『ブラジルの月』としてまとめました。

それ以外の句を拾い集めて、ここに私家版の句集を編みました。

出来不出来は自分では判断できないところがあります。しかし、人から見れば取るに足りない句であっても、私にとってはここ数年の生の証のような句ばかりです。

2009

おぐらきを鶯あそべ山茶花に

春時雨わたりし道の余光かな

パリ祭やさび抜きの寿司売れ残り

2010

ねじもどす注連（しめ）一尺の身じろぐや

露の臺一つを惜しみ播りにけり

硝子戸の間（あい）に蜘蛛ゐし琢木忌

夏痩せの膝打つ音や父の句坐

卒寿兜太スクワットする文化の日

天井板隔てて鼯の温みかな

2011

梢わたる松の裏声冬深し

ホコ天に公暁潜むや実朝忌

百均にチョコも凶器も実朝忌

人日の孫白粥に緑添へ

2012

蜘蛛の糸春光滑る太さかな

たまゆらを息吹き込みしシャボン玉

風颯る一人静かの心揺れ

母の日や与謝野源氏に儼匂ふ

軍手刺す涸びし蛙喜雨来る

勘三郎義士の日待たず逝きにけり

2013

友逝きぬ寒の見舞ひの誤字ひとつ

寒灯に魚煮崩るる匂ひかな

春遅々と緞帳隔つ音合わせ

緘黙（かんもく）の声知らぬ子も卒業す

一塊（ひとくれ）に鍬の錆色春の土

尾つぽなき蜥蜴が前行く原爆忌

秋暑し大方清ら虫の死屍

写経紙の堂宇に散るや西鶴忌

蟪蛄の今際（いまわ）浄からず腹蔵す

枯山水砂の汀（みぎわ）の石露の花

なかなか二歳（ふたつ）の指を冬麗ら

2014

折り鶴の折り目もたたず去年今年
倫敦の漱石葉月に賀状つく

(福井 西超勝寺にて)

凍解けや遺骨を溶かす雫音

春泥に落ちて檸檬の孤となりぬ

小綬鶏と一言主と鉢合わせ

おのおのに畝の向きあり土起こし

春暁や影添ふまでのうすあかり

虻の羽音けうとき浄土の日永かな

余念なき孫の喃語や桃の花

第二芸術論とふいけず春愁ひ

なごり花西行恋ふる歌碑十余

更衣風一枚は足裏(あうら)まで

手づかみの飯(まま)の荒ひげ武者飾り

案内(あない)するに新樹の光お堂ぬち

炎天や花の迷路に老い二人

へイトスピーチ結句あわれや權（むくげ）咲く
死後に聞く友の鬱屈桔梗（きちこう）や
ふたたびは訪（おとな）はぬ村曼珠沙華
鬱の氣の日に異（け）に深し蚯蚓鳴く
金木犀花降る際（きは）にほとりせむ
わが嗚咽霜降る通夜の母の辺（へ）に
わが師はも呆（ほう）けたまひしか昼の月
一遍の裳裾の風や石露の花
捌（さば）く紙に指先切らる神の留守
危ふくも皇帝ダリア句座に生け

「出現罪」の言葉は重し師走冷え

（宮沢賢治「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」より）

句帳乱るる父の癖字や冬木立
狐火を語りついでに猫の訃も
干柿の渋抜けきらず師走入り
薄目あく嬰に障子のうすあかり
辺（ほとり）して千年樟に北風（きた）を聞く

2015・1

門前のまずは夜声に去年今年

山の端の寒禽こずゑの一つ影

刃もの研ぎ悴みし手に鉄匂ふ

読初めや句註は眼鏡のレンズにて

村棄つる思ひに眺む冬の耕

わが師はも呆（ほう）けたまひしか昼の月

鋪道（みち）の供花今朝も生けらる震災忌

木の虚に蟻をほじくる寒旱

寒雀枯生（かれふ）より飛び追ふて飛び

山焼きや古書の揃ひの持ち重り

漱石に紙衣の匂あり震災忌

山椒の影に棘ある冬日向

2015・2

父に添ふ延命七日遠花火

川面縫ふひかりの川や寒の明け

わが呆（ほう）け妻の呆けや春の月

梅の香を幾度も妻に尋ねけり

薄氷を踏むや幼き日のきしみ

授かりし腹帯立てて桜餅

うなさるるを夢ごと揺する余寒かな

春服やフオークを皿に指ピアノ

わが師より未明の電話二月うつ

白子干父に類句を拾ひけり

われとわが老い声を聞く雨水かな

老農の黙して逝きし雨水かな

由来さへ聞かぬ小さき妻の雛

降り籠められて土筆の雨と思ひけり

春の雨老いては雨の気に聴し

セロ弾きの弦切るまで猫の恋

大根のごつという音二月尽

群鳥のひるがへる空春シヨール

狐面ほろとはずれし雛の会

雛祭り狐の面を持ち帰り

幼ごと壊して終る春暈

喜びの口つむぎゐて辛夷咲く

雛あられ姉弟でひとつ鉢

ひとつこと妻は同志に夜の梅

青饅や心理ゲームにしてしまふ癖

先駆けてのみどに老いる竹の秋

研ぎあげし刃に指を当つ花の冷

老いごとに句を貶めず黄楊の花

句でボケてわれとつっこむ木瓜の花

ひさかきの畝傍ををしと匂ひ立つ

あぐら坐を子ら奪ひ合ひ蓮華草

たんぽぽを有刺鉄線越しに摘む

山椒の芽摘み来し妻に棘の傷

歳時記のレ点は父の春の項

竹の秋老いに遅速と云ふはある
たまゆらを息ふきこみししやぼん玉
硝子戸の間（あひ）に蜘蛛ゐて啄木忌
照る花と翳ると色の潮目あり

2015・4

とのぐもり桜一樹に染まりけり
花の雨こぬか雨より降りはじめむ
わだかまりなほ消えぬ妻花の雨
莫菴敷きに人のみぬ間の花の影
莫菴に揺るる花影七分のおぼろかな
春事を師の見舞ひからはじめけり
呆けてはうつつ句のこと紫木蓮
師の怒り疎かにせず花蘇芳
導尿管が引つ張っており花曇
女体まぶしむ少年の貌山笑ふ
つちふるや天皇を見し話など
歩に纏ふ私の風に蝶が来て

一癖もなくてはさびし木の芽和

石鹼玉に抱きつく体のおぼつかな

フリル嫌ひで通して妻の春日傘

おろそかに聞けぬ病や風ひかる

朧夜の留守電にきく師の氣息

ぼうたんのあつみのたけをながめをり

頬杖について今はの牡丹かな

妻の指むらさきに染め露の糸

露晒す水にみどりの屈折光

葱坊主ここでしばらく蹲る

死ぬものと書いてあるらし八重葎

経をへて雨音近き穀雨かな

たんぽぽの絮吹く息の尖らずに

蝶の道あれど番ひてはただ空へ

春暁を妻うなさるる夢の嵩

濫読の崇りてまぶし白牡丹

羨道に水垂るごとし山の藤

どくだみに軍手破れて爪にほふ
落剪つて傘葉はそこに置きしまま

2015・5

老いごとに句を貶めず黄楊の花
十葉や老いごとならぬ空華の句

(斎藤空華 俳人 (1918-1980))

牡丹散り嫗のむなぢほどの薬

綾取りの妻のおよびに孫および

汚るるを妻は一手に落の爪

芍薬の水くぐらすも夜の蟻

なきひとの名もかかれゐてころもがへ

豆こぼしはずむが嬉し豆御飯

師の淹るる新茶おのづと人となり

句の高み散りて知らるる桐の花

青蜥蜴のたうつものを今生に

迷惑の受身夜蜘蛛に脛這はれ

歳時記に蜘蛛の句あまた楽しかり

風鎮の見つからぬまま聖五月

街道は塔にますぐや柿の花

満足の目まで埋まりし土蛙

再発のうれひ蚩を握りしめ

二度までも蝉飛込みし父の通夜

そらまめの鞘折る音の夫婦して

なきがらの蜘蛛の軽さや上箒

水底にたにし^の道も交叉して

木暗がり卵の花散りしふたところ

犀の角のごとく筍まがりをり

蝶の渦たちまち消えし夏野かな

かの子規に鄙吝の句あり夏薊

呆（ほう）け芍薬耳鳴りを聞き経を聞き

羽化待たるる蛹ピンクのひめじよおん

病院の雨の見どころ五月雨

腸（はらわた）のひととこ紫陽花色に染め

ポリープの貌と云ふもの濃紫陽花

上行二つ横行一つ花空木

万緑やひと日ひとりの座と決めて

2015・6

番ひ蝶屋根の起伏をなぞりゆき

苗筋に騙し絵のある植田かな

根切虫愉快犯としか思われぬ

手の臭ひつけてしまひし燕の子

内と外糞まり分くる燕の子

癌のこと父は知らずに麦こがし

日照雨初老の影を前に踏み

でで虫の近江の湖を曳く如く

龍の玉百足千匹殺しけり

息遣ひおのづと深しほうたる

酔い止めを飲んで多度津の夏霞

ほうたるや拳の穴に臭ひけり

蛭袋やきやうだい仲がよすぎても

かずら橋妻も揺れをり合歡の花
蝮死すも一物腹に紋歪みをり

2015・7

今生に裁くものなし原爆忌

ここよりは女人禁制夏料理

窓簾光の滝の降（くだ）りけり

ガガンボや夕焼けかくも美しき

母の写真までが美し夏座敷

立像の衣紋流れて涼しけれ

葦拵むとき来たるらし夏の月

王陵の谷急く白雨墳動く

扇ぎやれば目瞑りて受く嬰子かな

夏星座孫と仰ぎてわが余命

じやれ合ふて嬰覗きこむ夏帽子

父の裸貫通創に触れしのみ

兵たるは一生ものか若牛蒡

レコードの黴る話や嫁舅

臍の緒が予備と二つに枇杷の種

翁面の髭煤けをり麦こがし

2015・8

診断書封して置かる遠花火

花火指すごとき今際の父の指

花火弁当予約回り来末期の日

萍に池の面赤し広島忌

誘蛾灯の音聞こゆ明日長崎忌

流星のごとき影ある肺写真

サシで聞く河内音頭や夏座敷

手話交へ手踊りぞよき宿の友

帰省子の不機嫌にゐる若白髪

裸子も翁の面が気にかかり

検閲の印がぶれをり百日紅

朝顔や老いの迷ひの蔓の先

術後の目何見しなごり秋隣

みことのり十度（とたび）も聞きて終戦日

終の棲家か筋ごとに見ゆ昼の月

水風船の爆弾抱へ夏少女

手に萎る紫苑恋ふるは姫女苑

蟬の殻孫の手をへて移りたる

2015・9

秋彼岸「寝どろ」と聞きし母の声

（「寝どろ」赤子が寝るときのごくずり）

月のデモ玻璃越しに打つ外の火蛾

秋茄子を素揚げにしをり酢の旨し

秋女郎払へば雄蜘蛛ふためけり

螭螂の若葉のごときうすみどり

憲法の官報号外鉦叩

月白にぬすびとはぎの抽んでて

九条のはふりましろきまんじゅしやげ

漱石にデモの賛あり秋入梅

たまゆらを蝶浮びるし曼珠沙華

精進のずいきの紅（こう）が酔に淡し

彼岸花腰折れ（こしよれ）地蔵の古狐

狐火のとんと聞かずも狐花

十六夜の月を柚子坊横切れり

うつ多き村のおなごや十七夜

賢治の忌帽子のごとき茸かな

2015・10

うつぶせの甕の底打つ昼の月

青毬を踏めば真中（まなか）に白き栗

喉太き鑑真和上冬瓜汁（とうがじる）

見せ消ちの句に父あます秋ともし

（妻籠にて）

空（から）水車双手に軋み昼の月

（馬籠にて）

棗噛んで馬籠の坂を降りけり

（清里にて）

清里に雪の浮き富士秋早

「ちようさじゃ」とだんじり曳いて強訴かな

漆葉を末（うれ）から染めし老いの紅（こう）

花芒尻尾で獲物数へし世

老いの身に苛み尽きずるのこづち

トリアージ訓練余所に穴惑

屍は曝さるべきかやまかがし

やまかがし人呼んでまで死屍の丈

跳ぶ蜘蛛とうつつを遊ぶ夜長かな

甲斐犬に足元嗅がれそぞろ寒

妻呼べば露吸ふ蜂の飛び立ちぬ

手鏡に野菊の花粉妻の留守

2015・11

どんぐりと零余子衆愚と言はば言へ

熟れかりん左見右見（とみかうみ）して福相や

ふうせんかずらをみなは陰（ほと）の瘦せるまで

冬耕や備中鍬に凭れる影

2015・12

冬夕焼麒麟に鳴くをせがむ声

鼻歌を妻の嫌ふや漱石忌

貫通銃創恥らふ如し開戦忌

老耄を想ふ冬夜の鰯雲

妻の辺に雑炊を炊き余しけり

貫通銃創恥らひし父開戦忌

翁面に真向きスクワット冬座敷

葱刻む手につくぬめりわれの憂さ

生き死にも斜に構へゐてせいこ蟹

掌合わせばほのかに柚子の香り立ち

原爆ドームの一日を銀杏散り尽くし

少年のわれの厭ひしクリスマス

病む妻が牡蠣を洗ひてまた臥せり

和紙で折る狐が立ちぬ冬芒

2016・1

無用者の系譜大樹に蔦枯るる

爺爺のワキ板に付き小正月

買初や澄雄句集の澄雄の字

父逝きて万両殖えし庭の内

山越しの弥陀の御座（おは）すや初二上

初句会水琴窟の塚ほとり

風呂吹の鍋ねんねこにくるみあり

人日の外（と）つ国のテロ粥噴けり

後影一遍上人初焚火

老い二人畏みもせず屠蘇の膳

連結に老い二人ゐて初詣

放蕩の祖父に倣ひしごんぼ絢ひ

ごんぼうの火を得てねじれ解き放つ

不意のハグわが背に軍手悴める

亡き人のわが心の坐水仙花

裸木の末（うれ）の癖むも美しく

玄冬や善哉の灰汁取りきれず

薄ら雪古塚（ふるづか）くだる靴の跡

佇めば枯葉小走る音も止む

2016・2

すでにして曇暗峠（くらがりとうげ）越え

人嫌ひとばかりは言へぬ龍の玉

鴉声（あせい）今まねびし君に春立ちぬ

末（うら）枯れて末に霜おく草生かな

冬木立鴟の気迫を支へけり

息白し肺腑画像の深宇宙

薄氷や貫く葦に動かざる

約（つづ）めれば裸木烟（けぶ）る美しさ

甘噛みのごと罵りてクロツカス

息をとめてと声降り来たり冴返る

息をとめてと目を瞑り聞く涅槃西風

露味噲に荒微塵の青残りをり

薄氷や漣光る片辺（かたほとり）

使徒マタイのごとき吏員や納税す

西行の老いの背広し春一番

母の試歩座敷に誘なふ春時雨
老農の法螺一抱への売り水菜
露の臺研ぎ細りの鎌匂ひけり
ひとつ影胸に抱ふる雨水かな
いとけなきものの手触り露の臺

(弘川寺の桜を想い)

西行桜もふふむ寒さのきのふけふ
西行桜も竦む寒さのきのふけふ
車椅子の手邪険にミモザ払ひけり
約まりは私俳句いぬふぐり
梅の木の癖み構へて花揺れず
初座り雛に真顔の手を伸べて
父の一期に隠れ煙草も雁帰る
約まりは呆(ほう)けの賛美亀鳴けり
弱き日の裸木の影踏みてゆく
一句だに成らぬ四温の鳥の糞
家々の禍福のあざなひ梅紅白

あとがき

俳句がなければ、ここ数年の充実はなかったと思われます。

また詠むことだけではなくて、俳句を読む楽しみも見過ごせません。

これからの人生を俳句とともに歩んでゆきたいと改めて考えております。